

危険都市の証言

写真は大阪都市環境会議（おおさかをあんじょうするためのあつまり）編『危険都市の証言』関西市民書房、1981年。柳田邦男「序文—現代都市災害の“戦記”」を紹介したい。

災害は現代の“戦場”である。そこでは、人命・財産が焼かれ、あるいは濁流に呑みこまれる。日本は高度な経済成長を遂げながら、都市災害が後を断たないのは、なぜなのだろうか。都市はいかなる病理を、内に秘めているのだろうか。

災害問題にメスを入れるには、災害現場以上の教科書はない。なぜ災害は起こり、なぜ災害を防げなかったのか。その解答はいつも現場にあるのだ。だから、防災対策に取り組もうと思ったら、まず“現代の戦場”に出かけて行くことである。本書のスタッフは、大阪の災害問題を考えるにあたって、まずそのことから始めている。そこに本書の迫力と価値がある。なぜ大阪で数百人の死傷者を出す天六ガス爆発事故が起こり、なぜ大阪で死者百人を超す千日デパートビル火災が起こったのか。その現場に足を運び、被災者の生々しい証言を集め、分析を行なっている。血と涙の中から、都市の病理と教訓を引き出しているのである。

災害というものは、その地域ならではの特殊性と、現代都市に共通の普遍性の両面を持っているが、本書は、その両面からアプローチを行なうことによって、問題の核心に迫ることに成功している。都市住民は、この証言記録と分析を読むことによって、天六や千日デパートの危険が、決して過去のものではなく、いままさに、身のまわりに存在しているものなのだというのを、はっきりと認識するだろう。その意味で、本書は広く読み継がれるべき現代都市災害の“戦記”といえよう。

柳田さんも指摘しているが、本書の二つの事故の生々しい証言は、心に迫るものがあり、貴重な都市災害の記録である。ここでは本書の扉に掲載された、サンケイ新聞社と朝日新聞社提供の4枚の写真を紹介しよう。写真1枚目は、雑居ビル火災の恐ろしさをまざまざと示した千日デパートビル火災。2枚目は多数の犠牲者が出た「プレイタウン」、3・4枚目は杜撰な地下鉄工事が大惨事と困難をきわめた救助活動。

いま大阪は、開発ラッシュに沸いている。「危険都市の証言」から学ぶことは多い。

(2020年4月9日)

